

## 開拓地／植民地への旅

### — 大陸開拓文芸懇話会第一次視察旅行団について —

尾西 康 充

#### 一、大陸開拓文芸懇話会とは

中国東北部、すなわち『滿州』開拓の現地視察をおこなうために大陸文芸懇話会のメンバー六名は拓務省の援助を受けて、一九三九年四月二五日東京駅を出発して長春（新京）・哈爾濱に向かった。同年二月四日、拓務省大臣官邸において発会式が開かれた大陸文芸懇話会とは、盧溝橋事件をきっかけにして日中戦争が本格化してから〈国策〉に協力する文学の創作が提唱され、島木健作や間宮茂輔の農民文学懇話会、佐藤春夫の経国文芸の会、戸川貞雄の国防文学連盟、中島健蔵の日本ペンクラブ、海音寺潮五郎の文学建設、木々高太郎の文芸学協会、長谷川時雨の輝ク部隊などとともに創設された作家団体であった。会報「大陸開拓文芸」第一号（一九三九年四月）の冒頭には、近藤春雄「大陸日本の文化」が掲げられ、「文化人の国家事業への積極的な、而も、直接的な参画」が呼びかけられた。中国東北部への視察旅行は「親しく現地状況を視察し、実践的文筆活動に資せん」とするものであった。発足時、会員は二五名——伊藤整、井上友一郎、春山行夫、林房雄、丹羽文雄、豊田三郎、徳永直、張赫宙、大江賢次、大谷藤子、小田嶽夫、大石千代子、立野信之、高見順、田村泰次郎、矢田津世子、福田清人、近藤春雄、荒木巍、神山潤、岸田國士、湯浅克衛、島木健作、芹澤光治良、田郷虎雄——であつ

た。メンバーには元左翼作家のいわゆる『転向作家』と早稻田系の作家が多いのが注目される。事務局は東京市四谷区南町八八番地の近藤春雄宅におかれ、総務委員岸田、庶務委員近藤・高見、事業委員荒木・井上、編輯委員福田、財務委員伊藤が選ばれた。会則第三条には「本会ハ大陸開拓ニ関心ヲ有スル文学者ノ会合ニシテ、関係官庁及ビ関係団体ト緊密ナル連絡提携ノ下ニ国家的事業達成ノ一助ニ参与シ文章報國ノ実ヲ挙ゲ併セテ其ノ文化的事業ニ協力スルヲ以テ其ノ目的トス」とある。拓務省や滿洲開拓公社帝国主義の野心を持った近代国家においては、つねに〈開拓〉は〈植民〉を意味し、土地と人民に対する支配と収奪を目的にしていた。

大陸開拓文芸懇話会の第一次視察旅行団は、近藤春雄、福田清人、伊藤整、湯浅克衛、田村泰次郎、田郷虎雄の六名が参加した。長春・哈爾濱までは行動をともし、それからは各人が単独で行動することになっていた。渡航を前にした二月二八日には、荒木巍、福田清人、湯浅克衛、神山潤、張赫宙、田村泰次郎が茨城県東茨城郡下中妻村小林（常磐線内原駅下車南約一・六キロメートル）にあった滿蒙開拓青少年義勇軍訓練所を見学し、『渡滿部隊』の壮行会に参列した。この日は夜一二時まで営舎内で、東京朝日新聞社主催の青少年と語る座談会を持った。さらに三月六日には、伊藤整、湯浅克衛、田郷虎雄が同所を見学した。滿蒙開

拓青少年義勇軍とは、「青年ノ皇国精神ヲ鍛錬陶冶シ、質実剛健ノ氣風ヲ作興シ以テ渡滿後滿洲建国ノ大業ヲ翼賛シ東洋平和確保ノ礎石ヲラシメン」とする組織で、一六歳から一九歳までの「身体強健意志鞏固ナル者」が「凡ソ二ヶ月間」訓練し、「終了後直ニ渡滿現地訓練所ニ入所」されることになっていた<sup>1)</sup>。現地において一年間の大訓練所での基本

訓練を受けて、小訓練所に移動し二年間訓練し、兵役の義務に服してから開拓民としての土地をもらって永住することが原則になっていた。一戸当たりの耕地規模は一〇町歩、平均三〇〇名で一個中隊を形成。一九三八年内原の訓練所で青少年の入所がはじまって、一九四一―四五年の間に総計二五一中隊（八六、五三〇名）が入植した。福田清人は「青少年義勇軍よりの感銘」（『大陸開拓文芸』第一号）のなかで、「あの純真な瞳の輝きを持つた青少年たちが更に大陸で磨かれその輝きと信念をましてゆく時最も立派な日本人の性格が新しく表現されるものと固く信ずる。それは理想的によりどころを失ひ、懷疑と否定の低徊趣味に墮した、その前の時代のかよわくいびつな性格をのりこえる逞しい弾力だ」と語った。ここでは過度に感傷的な言葉を使って美化されているが、義勇軍訓練所では、集団訓練が重視され、小銃を持つての歩哨巡察などの警備方法も教え込まれるという、〈兵農移民〉としての軍隊的訓練方式が採られ、訓練を修了すると彼らは武装開拓移民として送り出された。しかし実際、彼らが割り当てられたのはソ連との国境近くの土地で、それらの多くは中国人の耕作地を日本政府が強権的に安い値段で買い上げたものであった。しかも食糧が足りないときには、中国人の家に押し入って食糧を盗む人間もいて、現地の人たちから非常な恨みを買うことになっていった。この結果、敗戦後引揚げる際に多大な悲劇を生んだ。上笙一郎氏が指摘するように、それら悲劇の原因は「青少年義勇軍の少年たちが中

国農民にたいして、盗み・暴行・凌辱などおよそ為し得るかぎりの暴虐を働き、また開拓団への移行に際して日本国家が、中国農民の田畑や家屋を強権的に取り上げた」ことにあった<sup>2)</sup>。

〈開拓〉および〈植民〉の本質は、現地で暮らしていた住民に対して国家的暴力がふるわれただけではなく、〈国策〉に従って転住させた自国の移民に対しても、帝国による支配と収奪が及んでいたことにある。本稿は、福田清人『大陸開拓』（一九三九年一月、作品社）や島木健作『満州紀行』（一九四〇年四月、創元社）、田村泰次郎『わが文壇青春記』（一九六三年三月、新潮社）、三重県立図書館に収蔵されている田村泰次郎文庫の資料などを参考にしながら、大陸開拓文芸懇話会の視察旅行の実体を解明する。

## 二、福田清人『大陸開拓』

（一）下関―プサン（釜山）―ソウル（京城）―ピョンヤン（平壤）

福田清人の『大陸開拓』「朝鮮」は、「私は大陸開拓文芸懇話会の第一回満州派遣団の一員として、春雨にけむる朝鮮海峡を渡った。連絡船は、大陸へ目ざす乗客が殺到して、混雑してゐた。定員が超過して、次の船を待たねばなるまいといふ話さへあつたが、幸ひ乗りこむことができた。船のなかは、すでに大陸の色彩が濃く、国防色の人、新しく内地で迎へた花嫁らしい人を伴つた協和服の青年などが見出された」という言葉ではじめられる（三〇頁）。下関からプサン（釜山）まで連絡船に乗って、ソウル（京城）に三日、ピョンヤン（平壤）に一日滞在した。都市間の移動には夜汽車を利用した。ソウルでは「二十人ほどの朝鮮の人たちにあつた。何れも文化的な仕事にたづさはつてゐる人で、かつて民族運動

のライターで、入獄したこともあり今は転向して内鮮一体の運動をやつてゐる五十歳位の雑誌社長や、鮮字新聞の幹部たち、あるいは若い文学者たちと会つた」（三二～三三頁）という。

福田は「内地」に比べて、「朝鮮の知識階級の人」が「実に座談においてもなにか公衆の前におけるやうに雄弁家」であることに驚かされる。彼らは「瞳を輝かし頬を紅潮させて、談ずるのである。レストランとか、ホテルのグリルとか、我々以外の人のゐる場所で、こんなことをしゃべつていゝのか知らと思ふほど、相当つきこんだことさへ語るのである。おそらく、長いあひだ口にするをつゝしまねばならなかつたであらうことを、最近はかなり自由にしゃべれることになつたといふ事情や、不言実行的な内地人に比して、さうした要素の割に反対のものを持つ人も少くない半島の人々の性格にもよることと思はれた」という（三四～三五頁）。このような福田の主張の根底には、帝国日本によって朝鮮半島の民衆が封建的遺制から解放されたという誤解がある。しかし自分の主張が誤解であることを感じさせられるのは、「ある雑誌」に依頼されて計画されていた座談会が「一部の人たちはあまり乗気でないやうであつたので中止」するに至つたことである。「われゝの聞きたいことは、向ふの作家生活といつた軽い程度の気持であつたが、向ふでは、そんなことをしゃべる興味がなかつたらしく、それよりもつとにか根本的なことをしやべりたく、それには話しても仕様のないことや、あるいは思想的な動揺があつてはつきりしたことを言へないやうな立場の人もあつたらしい」という（三八～三九頁）。彼らは本当は何を話したかつたのか、彼らにはどのような「思想的な動揺」があつたのか、福田は彼らの心境や立場を暗に触れるだけで、それを掘り下げようとすることはない。「入獄」や「転向」という言葉が使われていたやうに、帝国日本が朝鮮

半島に配備した警察組織によって過酷な弾圧がおこなわれたことが分かる。

朝日新聞社ソウル支局の企画で、明月館という朝鮮料理屋で記者たちとの座談会が開かれ、「妓生」を觀賞したときのことは、つぎのように記されている。

朝鮮料理は僕の口にはちよつと苦手であつた。しかし、この新聞社の人たちは、おそろしくはりきつて、元氣な議論をきかしてくれりた。満洲、北支を通じて、土地の人々は、卓をたゝいて議論する風習をもち、そこに自然人々の発言する未完成の世界の存在と、内地では不言実行するかあるひは沈黙して何もやらぬか二つの手しかないやうに、周囲がぎしくつめこんでゐるので、日本人は決して定論になつてゐるやうに、口下手な国民性を保つてゐるわけではなく、環境がさうであるため、自然口重くなつてゐるのだといふことを思はないではゐられなかつた。（四二頁）

厳しい検閲によって言論が統制されているという社会的背景を一切考慮せず、「内地」では「自然口が重くなつてゐる」ジャーナリストでも、テーブルを叩いて議論する「風習」があり、人びとが発言を許される「未完成の世界」のある朝鮮半島や中国大陸にすれば、「元氣な議論」をすることができるといふ。移民政策を推進するために、移住先には広大な土地に自由の気風があふれていることを日本政府が喧伝していたやうに、福田がいう「環境」のちがいは、政府のプロパガンダにもとづいて形成された想像上の産物であつた。さらに福田は「朝鮮の理解者や正しい批判者は、かうした内地からのよきジャーナリストに、相当おうてるやうで、その人たちもさうした正義心が強いことが議論のあひだにかゞはれた」というが、植民地に対する支配と収奪にジャーナリズムが

どのように関与していたのか、その責任の所在を明らかにするためには、彼らの「正義心」を分析する必要があるだろう（四二頁）。

（二）瀋陽（奉天）―長春（新京）―哈爾濱―佳木斯

大陸開拓文芸懇話会の第一回視察旅行団は、ピョンヤンから夜行列車で移動し、瀋陽に一泊した後、五月一日長春（新京）に到着する。途中、吉林省四平（四平街）を見学している。福田は中国東北部に入ったときの印象を「大陸はやうやく、春がよみがへり、赭色のはてしない耕地を縫つて、揚柳の緑がまことに美しく、青色の服を着た満人農夫も、点々とあたゝかい日ざしの下に働いてゐる」と記している（四五頁）。現在、中華人民共和国と朝鮮民主主義人民共和国との国境となっている鴨緑江をこえようと、南満州鉄道沿線の雰囲気「大変ちがつてくる」ことに驚かされながら、「駅々に、満人の愛路少年団が直立」していることに気づかされる。「いつもかうして立つてゐるのかと思つてゐたら、僕たちの乗つた列車に、訪日北支経済視察団の一行が乗つてゐるので、敬意を表してゐたのだといふ事」が分かつた（八四頁）。福田は旅行中、日本からきてゐるいくつもの視察団と出会う。「鉄道を大切にすることは、沿線の住民に徹底してゐるらしい。満鉄でもこの愛路運動に宣伝映画や巡回劇団を動員して、延長一万キロ、その沿線七百万の民衆の頭にしみ入らせようと努力してゐる」という（八五頁）。瀋陽では、現地住民の生活区を歩いてみるが、「かうした満人の住居方面にはデパートのほか日本人はほとんどゐなかつた」という（九二頁）。

五月二日長春で開催されていた国民大会に参列し、「民族協和と、新興満洲国の意識をたかめる大会で、全満の各民族の主として青年層が動員され五万の大衆が、市内行進を行つた。／澄んだ五月の大気のもと、

遅しくのびゆく青春の国の、力強い足音をきく思ひがした」という。都市の南郊に新設されつつある「官庁の建物のとりどり様式、大きさは、そのはてしない坦々たる大路をはさんで眼をみはらせた」とし、「日本の官庁のどれもが到底かなはない、力強い線の構成と芸術的な色彩とで、この大陸をしめくゝる機構の姿を示すものゝ如く」思われ、「これらが、大同広場一帯をうづめた時、アジアのあるひは世界のもつと近代的な市街となるのではないか」と考えた。だがその一方、長春は住宅が少なく、「若いサラリイマン達は、通風の悪いあなぐらみたいたなアパートに住んでゐる」。旅館も部屋が足りず、国民大会が開催されていたこともあって、「我々一行六名はつひに三日間を八畳一部屋でくらさねばならなかつた」（四五―四七頁）。

偶然喫茶店で、「奥の移民地から帰つたばかり」の久米正雄に会い、同夜は満洲映画会社の李香蘭たち俳優と一緒に中央飯店で食事をし、深夜まで談笑した（四七頁）。田村泰次郎文庫には、このときの旅行資料が保管されているが、そのなかには満映の映画「万里尋母」「大陸長虹」の写真も含まれている。一九三八年公開の「万里尋母」は、監督脚本坪井與、撮影大森伊八、出演葉蓉・張敏・戴劍秋・郭紹儀・王丹他であった。同年公開の「大陸長虹」は、監督脚本上砂泰蔵、周曉波、撮影大森伊八・玉置信行、出演王福春・杜撰・鄭曉君・郭紹儀であった。このときの出会いを通じて田村は李香蘭とは終生の親友となる。

以上のような福田の記述に比べて、田村は「わが文壇青春記」のなかで、現地の文学者たちとの懇親会では、拓務省から派遣されて「威張つて（先方には、そう見えたにちがいない）乗りこんできた私たちに反撥する空気」があつたようで、「一人が立って、正面から攻撃してきた」ことが記されている（三四頁）。田村によれば、「私たちは一瞬、たじろ

んだ」が、田郷虎雄が即座に立ちあがって「私たちは、あなた方に乞われて、今日のこの会に出たのだが、私たちに喧嘩をふっかけるつもりなのなら、私たちにも考えがある。よろしい、売られた喧嘩なら、買おうじゃないか」と断言したので、「一座はしいんとなった」という(三三四～三五頁)。

長春に三泊した後、哈爾濱に五月四日到着、亜細亜ホテルに宿泊した。翌日郊外一五キロの位置にある滿蒙開拓青少年義勇軍哈爾濱特別訓練所を見学した。特別訓練所は、各地「訓練所の建設等の関係から貯水池的役割」を果たすもので、哈爾濱以外に遼寧省鉄寧市の昌図、黒竜江省哈爾濱の一面坡にあった。翌々日朝一〇時に哈爾濱碼頭から排水量約七〇〇トンの客船「紀賢」に乗船し松花江を下って黒竜江省佳木斯に向かった。船中一泊して丸二日かかって到着、下船する際、「満警がかなりきびしい所持品や服装の検査をしてゐるが、満人たちの表情は呑気である。大きい風呂敷一つに家財一切をつゝんだ移動的な労働者が多いやうで、中には半島人の顔もあるが、皆一種のパス・ポートを持つてゐて、満警はそれにはられた写真と実物を見くらべてゐる」という(四九〇～五〇頁)。当時黒竜江省および吉林省は分割されて三江省が設置、通河県、鳳山県、湯原県、蘿北県、綏濱県、方正県、依蘭県、樺川県、富錦県、勃利県、宝清県、饒河県、同江県、撫遠県の一四県を管轄する省とされ、一九三七年七月佳木斯が設置されて、三江省の省政府所在地となった。田村泰次郎文庫に所蔵されている「三江省拓政概況」(一九三九年二月)の「結語」には、「本省ハ未ダ治安良好トハ言ヒ難キモ本年末ニ於テハ治安克服ノ見透シヲ有スルヲ以テ此ノ治安ノ恢復及交通通信ノ完備、移民ノ入植等ト相俟ツテ必ズ産業ノ發展ハ期シテ待ツベキモノアルベク現時ノ国際情勢ヨリシテ本省将来ノ發展ハ日滿両國ノ軍事上、經濟上極メテ重

要ナルヲ以テ省及管下各縣市全職員ト共ニ目下治安第一主義ニ基キ治安ノ確保ニ邁進シツツアリ」とある。これらの言葉からは、植民地政府による統治に抵抗する人びとが依然として広範に存在していたことが分かる。

福田は「今度の旅行で、主として青少年義勇軍中心に視察したい」と思っていたこともあって、勃利訓練所に足を運ぶ(五一頁)。現地訓練所は勃利以外に嫩江・孫呉・鉄驪・寧安の五カ所にあった。「滿蒙開拓青少年義勇軍の近況」(一九三八年八月)によれば、一九三八年七月一日現在、勃利には一、八六九名、嫩江には二、九二一名、孫呉には一、二二八名、鉄驪には一、三三三名、寧安には二、四一三名が所属していた。それらを合計すると九、七五四名で、入所予定人員の合計三〇、〇〇〇名に対して三二・五パーセントにすぎなかった。現在の黒竜江省七台河市勃利県桃山にあった訓練所は、「三江省拓政概況」によれば一九三八年二月入植、入植者数は七九六名で、一九三三年三月に入植した三江省樺川県彌栄村や同年七月に入植した同省依蘭県湖南宮の千振村の南にある勃利駅から約四〇キロメートルの距離にある。福田は訓練所の様子を「駅から三十八キロ、高原の起伏にはてしなくつゞいたトラツク道路のはてにあつた。遠い山脈に視界はさへぎられてゐても、都会近郊のハルピンのそれより、地域的に気宇を大きくしてくれるものがあるのは当然であるが、それだけ世間から遠ざかつてゐることも当然である。卑俗な世間からは、離れるだけ離れて、新しい型の人間を作るべき目標は、義勇軍の方向にはつきりしてゐることであらうが、世間といふものゝ持つ好き面は、努力して注いでやらねばならない」と記している(五一頁)。はっきりとは書かれていないが、勇ましい名前とは裏腹に、実際には過酷な環境におかれていたのである。彼らは「集団的な娯楽の道具」を欲

しがつており、「創造力の豊かな、器用な子」が「たくみにまるで商品のやうに作りあげた、廃物の防寒具の皮を利用したグローブ、ミットの類、濡れた麻糸で捲いたボールの類を幾つも」をみせてくれた。駐屯している軍隊の営舎にいて素人芸人に会うのを楽しみにしていたり、中学の講義録のような「知識的な」読物を求めていたりする少年たちもいた（五二―五三頁）。満蒙開拓青少年義勇軍の創設に関わった関東軍司令部附満洲国軍事顧問の東宮鉄男と天皇制的農本主義者の加藤完治は、第一次彌栄村と第二次千振村への移民計画が成人を武装させて入植させたことに失敗の原因があると考えていた。上笙一郎によれば、それは「第一には、中国農民たちの抵抗・襲撃による生活と生命の危険である。そして第二には、のちに〈屯墾病〉と命名されるに至る開拓地特有の集団的ノイローゼの発生」があった<sup>⑤</sup>。妻子を思ってホームシックにかかりやすい成人とはちがつて、「青少年は心身共に柔軟なのでホームシックにかかりにくい」という判断から東宮と加藤は青少年の動員を考えたのだが、実際には「自閉型」と「攻撃型」という二種類の〈屯墾病〉を発症させ、彼らの間に「蔓延」させてしまったという<sup>⑥</sup>。面会した所長宗光彦は、第二次千振移民団の団長も兼ねていた。「三江省拓政概況」によれば、千振の集団移民は三江省依蘭県湖南営に一九三三年七月入植をはじめ、戸数三三四、人口一、一八四を数えるまでに発展していた。

勃利訓練所の視察を終えた後、トラックに乗って去ろうとすると、麓の勃利の町から来たトラックから島木健作が「元気な姿で」降りてきて「三十分ばかり」話したという（五六頁）。このときの島木との出会いについては、島木も記録に残しているので後述することにする。

福田は一度哈爾濱に戻ってから、黒竜江省綏化に汽車で移動し、そこ

で一泊してから一日一回通じている仮運転の列車に乗って伊春市鉄力にある鐵驢訓練所に向かう。第五中隊に福田の故郷長崎県出身の一二〇、三〇名もいると聞いて会いにゆき挨拶をすると、義勇軍の志願書に添える体格検査表を無料で作成していた福田の父親に感謝の意を述べる少年がいた（六一―六二頁）。鐵驢訓練所には「大変なごやかな印象」を受けたと福田がいうと、所長は「山の見えることをなつかしがり、それが何か目標を与へることになる」ことや、「本部の望楼に登つて、各中隊がすべてみられること」など「地の利」がよいと応えた。

### （三）哈達河―城子河―龍爪

集団移民の第一次彌栄や第二次千振に加えて、福田は第四次哈達河・城子河、第六次龍爪を訪問している。田村泰次郎文庫に所蔵されている「満州拓殖公社要覧」（一九三八年一〇月）によれば、哈達河と城子河は牡丹江省密山県にあり、一九三五年六月入植がはじまった。当時哈爾濱市に設置されていた濱江省南部の牡丹江市および寧安県、穆稜県、東寧県、密山県、虎林県の五県を管轄する省として牡丹江省が新設された。総人口は哈達河四四七名、城子河五三五名であった。龍爪は三江省勃利県にあり、一九三七年七月入植がはじまった。総人口は二四八名。城子河では、虎林線鶏西駅までの六キロメートルの間、福田は移民団のトラックに便乗した。「近くの満人の女とか小学生が便乗をたのむと、快く乗せてやる。凸凹の道で、トラックがゆれると、皆愉快に騒いで笑ふ。満語で盛んに、移民団の人と満人達となにかしやべりあつてゐる。和気みちて見てゐてもいい風景であつた。凸凹道のトラックは、かうして一種の民族協和の仲介にも役たつてゐるわけである」という（七七頁）。

佳木斯や林口などの移民地の近く、あるいは綏化、北安などの鉄道の

分岐点のような小都会の小旅館は、「最下等でも五円」は出さなくてはならず、しかも「内地の木賃宿みたいな汚さ」で「よほど手筈をととのへておかぬと、満員でしめだしを食ふ」。「視察者や奥地の土木や鉱山関係者連で、こみあつてゐる」からである。それに比べて彌栄には移民団経営の宿舎があり、千振には一軒旅館がある。その他は、本部に泊めてくれるが特別に頼むと農家を世話してくれる。「その方がその人たちの本当の生活にもふれるし、かへつて家庭的な清潔さがあつて快い」。哈達河では「宮城県の人で北大営の訓練をへてきた人の家に厄介」になつた（七八頁）。

パイナップルの罐を切つたり、鶏をしめて御馳走してくれ、夜は一時頃まで、色々語つてくれた。満人の家を改造した長い建物に三家族が住んでゐた。

農業を手伝はせてゐる十二三の満人の少年も、家族同様に一緒に食事をしてゐた。

「満人の子供はあれでも、賃金などにはがっちりした考へを持つてゐて、最初契約する時は我我がびつくりするほど、自分の賃金を一銭でも高く主張するんでね―その代りよく働くよ。」

とその家の主人は言つた。

厩で、馬の世話してゐた満人が、その側の小舎に寝に入つた。すると平気で又言つた。

「あの男は昔は匪賊だつたといふがね。」

私の枕もとには、二三年來持ちだす必要のないといふ小銃が、壁にたてかけられてあつた。団本部の宿舎には、五十銭とか七十銭とか宿泊料をかいてある。

農家に泊つた場合は、一円五十銭か二円程度気持の問題として払

ふやうに聞かされた。

(七八〜七九頁)

現地の住民から強権的に安値で買い上げた「満人の家を改造した長い建物」、現地住民からみれば抗日運動の闘士である「匪賊」という言葉が使われているが、彼ら移民団もまた帝国日本に遣わされた侵略者の一員であつたことは明らかであるにもかかわらず、格安の宿泊料に彼らの善良さがみいだされている。「三年來持ちだす必要のないといふ小銃」は、かつてはそこで使われる必要があつたということの意味しているのである。視察旅行に同行している「ヒットラア・ユージェント駐日代表のシウルツエ君」に届けられた「千振の小学生の描いた数枚の図画」には、「丘の上なたてられた忠魂碑と、郷里からもつてきた神社の小さい祠」の絵で、「忠魂碑」には「この開拓のため匪弾に倒れた二十余名の靈魂が眠つてゐるのである」ということもエピソードとして紹介されている（八一頁）。さらに城子河には「あの悲劇をうんで解散した鏡泊湖畔、鏡泊学園の人達が、一緒にゐる鏡泊郷があつた」といい、福田が夜訪ねると「五、六人の人が集つて彼等が渡つてきた日のことを語つてくれた」という（八三頁）。黒竜江省寧安市にある鏡泊湖の周辺は、水稻栽培のための移民適地とされ、一九三三年四月旧制国土館中学によつて鏡泊中学が設立され、数次にわたつて移民が進められるが、現地住民の抵抗に遭つてその都度頓挫したという歴史がある。「満州日報」（一九三五年八月一六日）の「鏡泊学園廃止？／北滿開拓史上に輝く足跡を残して」によれば、「大正元年五月山田悌一氏を総務に戴き血に燃ゆる若き青年学徒が満洲開拓の意気高らかに東部吉林省の一角鏡泊湖畔に創設せる鏡泊学園は創立以來屢次の匪禍に幾多の犠牲者を出し、曩にありとあらゆる不便に遭遇しつゞよくこれを克服雄々しくも□□の第一線に立ちて産業

開発、文化向上の使命遂行に今日まで絶えざる努力を続けていたが、昨年同学園の大黒柱山田総務が非業の最期を遂げるや、爾来内部は経済的に極度に窮迫し最近愈々資金難に逢着したので、過般米同学園の幹部は各関係機関代表と存続問題につき種々協議の結果、遂に北滿開発の史上に輝く過去三年の歴史を残して近く廃止することに決定した模様である」〔□―判読不明〕と報道されていた。大アジア主義を提唱していた国士館理事で鏡泊学園総務の山田悌一が一五〇名を鏡泊湖畔に入植させたのであった。

学校法人が開拓を手がけた鏡泊学園と同じように、政府が直接主導権を握ったのはちがうケースが、宗教学人天理教が関わった天理村であった。「大阪朝日新聞」（一九三三年一月一九日）の「日本の行くべき道／本社副社長法学博士下村海南」では、「満洲への集団移民約七十五団体その中仕事に着手せるもの十指を屈するにすぎず、しかもそれも多くは失敗であるという、功を急ぎ計画の粗漏なものも多かるう。知る限りでは上記の武装移民の外に吉林の鏡泊学園に望を嘱してゐる。それは伯西移民に経験ある国士館の拓殖学校によりて計画されてゐるからである。また天理教の移民計画にも多くを期待してゐる、それはその背景の力と信仰と、今日まで外国語学校まで創立しその歩武を進めつつあるからである。猶これら移民問題につきましては更に他日筆を改めたいと思う」とある。福田は訪問しなかつたようだが、田村泰次郎文庫には「満洲天理村一覽」（一九三九年五月七日）と「満洲天理村視察記念絵葉書（六枚入）」（一九三〇年九月二八日）が収蔵されていることから、田村は現地を視察していたことが分かる。「満洲天理村一覽」によれば、天理村は哈爾濱郊外東二二キロメートルのところにあつて、三棵樹駅が最寄りの駅である。当時入植戸数六二、人口三〇六名を数えていた。

（四）哈爾濱―北京―天津

黒竜江省黒河市の嫩江訓練所を見学した後、福田は哈爾濱に戻つた。それからさらに瀋陽へと汽車で戻るとき、偶然「ハルピンから瀋陽の高等法院に転任する高等学校時代の友人である司法官」と一緒になつた。彼は「法廷における満人の心理をつかむ材料」を探し、「日本人で満人のなかに根をおろして生活した人」の本がないかどうか聞いた（九三頁）。さらに「満人たちは法律ができたので、一寸した事でもすぐ訴訟をおこして、こまごました事件が多くてやり切れぬといふやうな話」をした（九四頁）。

瀋陽から北京、天津へと向かう。天津では「日本人へ対して、いくつかのテロが行はれ、しかもその隣りの英租界当局に対しては、その日正午をもつて、テロ犯人引渡しについて期限つき交渉の当日で、なんだか僕の歩調も散歩するといふ悠々たる歩調をとすれば乱しがちだつた。今度の旅で直接見たことだが、満洲ではもちろん大きな意図をはらんで、建設の進行は一筋にすすんでゐる。蒙疆地区でも、いかにも組織だつたまとまりで、あの半沙漠のやうな原野にも秩序がたつてゐるのを感じた」という（一三〇頁）。各国の租界地が隣り合う天津では、現地住民の抵抗活動が続いていることがうかがわれる記述であるが、天津での事件に關しては探られることがなく、それとは対照的に「満洲」や「蒙疆地区」においては「一筋に」建設が進み、「組織だつたまとまり」で「秩序がたつてゐる」ことが強調される。

天津から大連に行き、大阪商船の客船に乗って六月一三日帰京、視察旅行は五〇日に及んだ。田村泰次郎文庫に収蔵されている「北支へ」というパンフレットによれば、大連と神戸の間の料金は一等六五円（洋食）二等（和食）四五円、三等（和食）一九円であつた。福田も田村も他に

承德や張家口、大同を観光のため訪問している。

ちなみに田村の『わが文壇青春記』によれば、視察旅行の費用は、交通費と宿泊費として拓務省から各々に「四十円」支給されたが、「いくらものの安い時代でも、四十円では大陸旅行は出来なかった」という(三七頁)——福田は現地では「満鉄や満拓(満州拓殖公社)からも補助」があったことを回想している⑤——田村は瀋陽や長春、哈爾濱のような都会では「夜になると単独行動をとって、遊び場へ出かけて行ったので、華北へはいったときには、囊中とぼしくなってしまった。そのために、北京では、一行は高級日本旅館に旅装を解いたが、私だけは西河沿の中国人の安宿にひとり泊った。南京虫と、一晚じゅうがやがやと人声のする騒がしさで、ろくに眠れなかったが、そのかわり、吹き抜けになった屋内の中庭に、売れ残った夜の姑娘たちがあつまって、その頃、日本軍占領地区、八路軍地区を通じて流行していた「漁光曲」などを合唱する歌声が聞けた。「漁光曲」とは、いくら働いても生活が楽にならない「朝の海にすなどりする漁民の嘆き」をテーマにしたもので、「ひとり眠られぬ中国式の堅い床で、その歌声に耳を澄ましながら、当時の中国民衆の胸に底深く沈んでいた諦めや悲しみを、しみじみと感じた」という(三七～三八頁)。

### 三、島木健作『満州記行』

治安維持法違反の容疑で日本共産党関係者一、五六八名が全国一斉検挙された一九二八年の三・一五事件では、日本農民組合香川県連合会書記の島木健作(本名朝倉菊雄)も検挙起訴された。一審判決で懲役五年の実刑判決をいい渡された後、大阪控訴院の公判廷では「過去の自分の

道に誤謬のあつたことを認め、再び政治運動に携はる意志はない」ことを表明し、控訴審判決では懲役三年に減刑された。下獄後、肺結核のため大阪刑務所では隔離病舎に移され、一九三二年三月仮釈放される。その後、次第に国策に協力する傾向を強め、農民文学懇話会や大陸開拓文芸懇話会のメンバーとなる。一九三九年三月二七日に下関を発ち、朝鮮半島を経て瀋陽、長春、哈爾濱から「北満洲」の〈開拓地〉を視察する。七月初旬に帰国すると「北満開拓地の課題」(『文藝春秋』一九三九年九・一〇月号)や「満洲旅日記抄」(『文学界』一九三九年一〇月)などを発表し、一連の視察報告記を『満洲記行』(一九四〇年四月、創元社)として上梓した⑥。島木は農民組合の書記として小作農と直接生活をともにした経験があるので、「満人部落に深く入りこみ、汗と垢とにまみれ、蠅と蚤と南京蟲とにおそはれながら、長年月にわたる民族間の土地紛争の解決のために力を尽くしてゐるやうな日本の青年に接したときには、感動の涙がにじんだ」というように、移民団の厳しい生活に密着して、彼らの実態をとらえようとする視点を持っていた(八頁)。

島木は一五カ所の開拓地と哈爾濱や孫呉、鐵驢、勃利、嫩江の青少年義勇軍訓練所を視察している。島木が繰り返し指摘しているのは、「私があるいた開拓団で、農耕に満人の力を使つてゐないところは一つもなかった」こと、すなわち農地を現地農民に小作に出していたり、不足している労働力を補うために現地農民を雇い入れていたりという、〈開拓団〉の農業が「満洲農民の労働力に依存」している事実であった(二〇〇～二二頁)。島木は、多額の労賃を現地農民に支払わなければならない現状から脱却することによって、「開拓団」が自立的経済を営むようになることを求めているのだが、地主小作関係の不平等、そしてそもそもそこは彼らの土地であったことにはまったく言及していない。「開拓地へ

行き、彼等と膝を交へて語る時、彼等の人間的な好き、美しさは、すぐに私達をとらへずにはおかない。彼等に親しみを感じ、彼等が好きにならずにはゐられない。国策開拓民といふことで、おそろしく鼻つましのつよい人間を想像して来るものは、むしろおどろくであらう。彼等の大多数はきはめて謙譲である」という（二七頁）。たしかに「開拓民の農民」のなかには、人柄が良く謙譲を尊ぶ気風があったかもしれないが、そのような彼らを〈国策〉として動員して中国東北部に入植させた帝国日本の国家的暴力については、今日あらためて批判の眼を向けなければならぬ。島木によれば、「大抵の団では、満農は、自分たちよりわい土地をつくつてゐながら、自分たちより、より多くの収穫をあげてゐるといつてゐる。そして、計画的に、満農を各部落に配属してゐる団も多いのである」という（二九頁）。島木は、日本人農民の農業技術が不足していることを指摘しているのだが、いうまでもなくそこは彼らの本来の土地ではなかったのである。上笙一郎によれば、「開拓関係の諸機関」には「満州移民は日本式の農法を捨て、中国人たちが伝統的にこなっている満州式粗放農法に従うか、あるいは機械力に全面的に頼つたアメリカ式農法を採用すべきかという意見が、生まれて来ていた」。

だが「寛克彦の古神道論に基礎を置いた農本主義者」であつた加藤完治が「猛烈に反対」をして、「日本農民の満州開拓はあくまでも人力による〈天地返し〉農法によるべし」と主張したのであつた<sup>1)</sup>。

島木が第七次四家房開拓団を訪問したときのことである。団長が不在だったので警備や農事指導員から話を聞くことになつたのだが、「鉄道の線に近く、交通に便であること、入植ただちに戸当り一町歩余りの水田耕作地を持つ」といい、住居が完成するまでは「満人の立ち退いた家」に住んでいたという（六四〜六五頁）。しかしそれを聞いた島木が

すぐに思い当たつたのは「日本人入植以前に、それだけの水田があつたといふことは、少なからぬ鮮人農民がゐたことを意味する。彼等と、さうして今開拓民が住んでゐる満人農家のもとの住民たちは？」という疑問であつた（六五頁）。するとつぎのような答えが返つてきた。

「今年、鮮人、満人二百五十戸ほどが立ち退きました。以前の村長（満人）は今団に雇はれ、団と在来民との交渉の間に立つてゐます。」

立ち退いたものは、どのやうにしてどこへ行つたのであるか？  
この人々からはそれについてほとんど聞くことはできない。

「買取価格は一戸平均六十円ほどださうです。」

このやうな平均といふものはほとんど意味がない。一响についていくらといふことをいはずこのやうな平均は。

（六五頁）

さらに島木は、現地農民から収奪した土地に関する日本の「自由移民団」同士の所有権争いについても触れている。言論統制の時代であつたので、現地農民に関する

問題を深めて書くことはできなかったのであるが、農民組合書記の経歴のある島木らしい、土地の所有権にとりわけ敏感な農民の感情に即した報告になつてゐる。島木は鐵驪訓練所に向かう仮運転の列車では、「二等三等の区別などはむろんない。日本人も満人も朝鮮人も、その各各のどんな社会層の人たちもみな一緒に隣合ひ、膝をつき合してゐるのである。かういふ列車内においてこそ、ほかでは得られぬ観察が恵まれるのである」という（一一一頁）。島木が目撃したのは、「五族協和」（王道楽土）という政府のプロパガンダにもとづいて構成された想像上の光景であつた。

ところで島木は勃利訓練所の本部で、福田と伊藤整、湯浅克衛の三名と出会ったことを記録していた。「連日の強行軍に、三君もやや疲れてゐるやうであつた」といい、「東京の文学者の会で時たま逢つたり、銀座で行きずりに見かけたりするだけだつた人々と、今かういふところで、かうして逢ふといふことは、何よりも同時代の作家への親しさを深めることであつた」という(八二頁)。しかし「逢へたことを喜んだのは束の間であつた。私達は話をするまもなく、すぐに別れなければならなかつた。庭へ出て、トラックが出るのを待つ間に、伊藤君は私達をならべて写真をとつた」という(八二頁)。このとき近藤春雄と田郷虎雄、田村は、福田たち三名とは別行動をとっていたのかもしれない。

島木との偶然の出会いについて、福田は後年、『現代作家回想記』(一九九二年一月、宮本企画)のなかでつぎのように記している。

そこへ一人とつぜん現われたのが島木である。我々は六人もの集団で、辺境の地でも、にぎやかに旅をつづけているのに、島木は一人旅ではつらいこともあるとうと、思いやりの姿勢で彼を受けいれようとしていると、島木は案内されて、我々と所長との対話の席に着くなり大声で叫ぶのであつた。

「満洲でも肥料の問題が起こっているぞ！」

おそらく土地が肥沃で肥料などいらぬなど書いたパンフレットの批判をしての発言であろう。島木はねぎらいの言葉より、この発見に同調してくれるのが喜ばしかったのだろう。

それはいかにも島木らしいと思いつつ、多く語ることなく、お互い別れたのであつた(六八頁)。

福田のこのような記述をふまえて、奥出健氏は「当時の福田の迷惑顔と憤懣とがよく表れている」としながら、福田たち大陸開拓文芸懇話会の

旅行団にとって「所詮先ずは「視察」であり、島木のような切迫したものである」と指摘する(8)。

として、満洲の農業を見るつもりはなかったのである」と指摘する(8)。

取材旅行において各々が何をみて、何を考えるかは、作家主体のあり方にかかっており、各自のモチーフに応じて所与の先入見を打ち破る視点が得られるかどうかが決まるのである。島木のこの態度は、田村も『わが文壇青春記』のなかで「当時の浮かれ気味の大陸進出の風潮に対し、頂門の一針として文学者の見識のあるところを見せた」という(三五頁)。田村によれば、島木の「見識」は、「つねに日本農民の大陸進出に關しては、彼らの擁護者であり、その立案者と実行者に対しては監視者であつた」ことにみられたとする。

私をはじめ彼を知つたのは、開拓文芸懇話会仲間水戸の内原訓練所へ見学に行つて、一泊したときである。その夜、訓練所側のひとたちや、満洲の現地から内地へ出張してきたひとたちと、懇談会があつた。その席上で、一座の空気は、開拓民の生活の前途を希望的に肯定した上で、話しあいがつづけられたが、彼ひとり開拓民の生活の前途は必ずしも樂觀出来ない、どこまでも喰いさがつて、相手側を手こずらせた。その言説は理論的で、その理論はまた、綿密に現地の生活の実態を調べてあるので、相手側にとっては不意を衝かれた感じであつた。度の強い、細ぶちの眼鏡を光らせ、幾分身体を猫背にして乗りだすようにしながら、加藤完治所長に喰つてかかる島木の姿は、恰度、豹が獲物に躍りかかろうとする姿を思わせた(三五頁)。

田村は、満蒙開拓青少年義勇軍訓練所の樂觀的な態度を戒めた島木の「見識」ある行動を評価している。島木は本来〈五族協和〉〈王道楽土〉という政府のプロパガンダの虚偽を見抜く眼を持っていたにちがいない。

土地を追われた現地の住民に対する思慮が欠落しているという限界はあったのだが、彼なりに抵抗の姿勢を示してみせたのであった。

#### 四、結論

児童文学作家および教育者としての側面を持つ福田は、「今日の戦争が、我々の民族にかけられた新しきアジアをうむための戦ひであると云はれてゐるがその戦の後に先遣隊として建設部隊として、アジアの一角から著々と若々しい歩調をとつて進んでゐるのが、実にこの青少年義勇軍である」（七二頁）と若い力に声援を送っていた。「更にまたこの義勇軍は国内の青年運動にも強い影響を与へてゐる。今までの青年層は地方の勤労的青年と都会の知的な学生層とばらばらになつてゐた点、大きな欠陥があつたと思ふ。／今年から年々幾万かの学生及び地方青年が、夏期の労働奉仕に大陸へ渡ることになつたのであるが、それは今後の青年運動に新鮮な発展を与へるにちがひないと思ふ」とするのは、都市と農村、知識人と農民など、地域や階級をめぐる格差が一段と拡大しているという社会問題を、「自由な新天地」である大陸への移住を奨励することによつて解決しようとする意図にもとづくものであった（七三頁）。プロレタリア文学が治安当局の弾圧によつて壊滅させられてからは、労働争議や小作争議によつて社会矛盾を是正しようとする言論人は姿を消し、「大陸開拓」に眼を向けることによつて民衆の不満を逸らすことが試みられるようになった。当時数多くの視察団が結成され、数多くの報告記や旅行記が発表されたのは、弾圧の危険を回避して国策に協力しながら文筆家としての表現意欲を満たすためでもあった。福田の『大陸開拓と文学』（一九四二年一〇月、満洲移住協会）の巻末には「大陸開拓

文芸単行本目録」が掲載され、「内地作家作品」として三六名および一団体の八五作品、「開拓地作品」として二名および三団体の五作品があげられている。若松伸哉氏は、「幻想としての〈故郷〉の中心に現実としての〈家族〉を置き、〈満洲〉における故郷（＝家族）の物語を紡ぎ出すことによつて、大陸進出という国策に必要な人間の現実的な移動を支えた点に、政治的な要請を背景にもつた大陸文学が担つてしまつた役割の具体的な一端」を指摘することができるという<sup>⑤</sup>。

福田は一九三九年五月八日佳木斯を訪問した件で、田村に触れている。「同行の田村泰次郎君は、昨年もこの土地にきて、ある雑誌に「佳木斯」と題したルポルターージュを書いたところその編輯者から、こんな日本内地の誰もほとんど知らんやうな土地のことを書くことは、編輯上こまると言はれたが、彼は二、三年しないで、この土地は、日本の誰もが知るやうに発展するとがんばつて、その編輯者を説得したが、見給へ、それから一年ならずして、自分の先見の明はあつただらうと得意さうだつた」という（一〇〇頁）。この後田村は独立混成第四旅団独立歩兵第一三大隊第三中隊所属の一兵士として一九四〇年一月から五年三カ月を山西省や河南省、河北省で送ることになるが、敗戦後、武装解除されて北京郊外の豊台の捕虜収容所に入つてから、管理され支配される人間の立場を本当に理解することになるのであった。他方、島木は敗戦直後の一九四五年八月一七日に宿痾の肺結核で死去する。死の床で敗戦の報を耳にすると、「これからやり直した」と呟いたとされるのだが、そのときもはや彼の寿命は尽きていたのである。

注

引用は福田清人『大陸開拓』（一九三九年一月、作品社）、『島木健作全集』第二二卷（一九五四年七月、国書刊行会）に拠った。櫻本富雄『滿蒙開拓青少年義勇軍』（一九八七年六月、青木書店）、立教女学院短期大学図書館編『福田清人・人と文学 — 「福田清人文庫の集い」講演集』（二〇一一年三月、鼎書房）を参考にした。

- (1) パンフレット「滿蒙開拓青少年義勇軍訓練所概要」（滿蒙開拓青少年義勇軍訓練所編集・発行）、田村泰次郎文庫所蔵。
- (2) 上笙二郎『滿蒙開拓青少年義勇軍』（一九七三年二月、中央公論社、一六七頁）
- (3) 同右、二三二頁
- (4) 同右、八四～八六頁
- (5) 板垣信「大陸開拓文芸懇話会と福田清人」、『福田清人Ⅱ』、一九八七年一月、宮本企画、四三頁）
- (6) 高橋春雄編「年譜」（『島木健作全集』第一五卷、一九八一年九月、国書刊行会、五〇八頁）
- (7)、前掲(2)と同じ、一四〇頁
- (8) 奥出健「大陸開拓を見た文士たち — 伊藤整を中心に」（『湘南短期大学紀要』第六号、一九九五年三月、二〇頁）
- (9) 若松伸哉「〈滿洲〉へ移される〈故郷〉 — 昭和十年代・大陸（開拓）文学と国内文壇にあらわれた〈故郷〉をめぐって」（『国語と国文学』第八四卷第四号、二〇〇七年四月、五二頁）